

鎌倉時代の日本漢音資料における濁声点加点について

佐々木 勇

一、問題の所在と本稿の目的

日本語における濁音の歴史は、諸先学によって研究されてきた。特に、近年、訓点資料を用いた築島裕・沼本克明の研究によって、濁音表示法の歴史が明らかに⁽¹⁾なってきた。

それによると、初期の段階については、次のことが分かっている。

一、濁音を表示することは、梵語音表記の場で「濁音仮名」として始まり、やがて、「濁声点」と「濁点」とに分化した。

二、両者のうち、声調と濁音とを同時に表示できる「濁声点」が生き残り、一一五〇～一一六〇年頃、複声点形式に統一された。

三、しかし、濁音のみを表示したいという欲求は消えず、濁声点を用いて、濁音を重点的に表示する資料が増加していく。

その後、一四〇〇年以降、漢語アクセントの和語アクセント化の影響を受け、濁声点は濁音のみを示す「濁点」となり、現在の右肩濁点に定着するまでの歴史が、具体的資料によって、記述されている。

また、その過程で、濁音表示の中心的方法であった「濁声点」の形式に諸種があり、宗派・流派によって使い分けられていた時代があったことも、広く知られるところである。

今、小林芳規『平安鎌倉漢籍訓読の国語史的研究』(一九六七年、東京大学出版会)第五章第五節に述べられた博士家ごとの濁声点使用の実態を、私にまとめると、次のようになる。

博士家の濁声点使用は、仏家と比べて遅れる。早い例は、『史記 孝景本紀』大治二年(一二七)点・九条本文選卷第十七保延二年(一一三六)点・同卷二十承安二年(一一七二)点などである。これらは、紀伝道の菅原家・藤原家の加点資料である。菅原家は、○形式の濁声点を用い、藤原家は、◦形式の濁声点を用いていた。藤原家の濁声点◦は、天台宗関係の仏家から学んだものであろう。

明経道は、濁声点の使用がやや遅れる。清原家は○を用い、中原家は◦を用いた。中原家の濁声点◦は、藤原家から学んだものであろう。

菅原家―○・紀伝点使用 清原家―○・明経点使用

藤原家―◦・紀伝点使用 中原家―◦・紀伝点使用

これら、家ごとの濁声点の使い分けは、室町時代になると見られなくなる。

右の事実が知られたことによって、鎌倉時代における訓点の系統をより正確に推測することができるようになった。

しかし、これらの研究は、濁声点の存在と形式とに注目したため、当該資料において濁声点がどの程度使用され、いわゆる清濁をどの程度区別していたのかについては、触れられるところがなかった。

本稿では、この点を調査した結果を報告したい。

二、鎌倉時代における清原家ならびに藤原家加点資料における濁声点

まず、加点者が明らかで、かつ残存する古訓点資料が比較的多い、清原家訓点本における実態を見る。

(一)、鎌倉時代の清原家点本における濁声点

(A) 金沢文庫本『群書治要』経部鎌倉中期点

金沢文庫本『群書治要』巻第一―巻第十の経部は、清原教隆の自筆加点本である。建長五年(一二五三)―正嘉元年(一二五七)にかけて加点された。奥書に依れば、この加点は、「相伝」された「訓説」に基づいている。この経部で使用されているヲコト点は、明経点である。よって、教隆に基づいたのは、清原家累代の訓説であろう。

金沢文庫本『群書治要』経部において、濁声点が加点された例は、次濁字を中心に三三二例であった。

これに対して、濁声点を省略して単声点を加えたと考えられる例は、疑いを残すものを含めて、十八例に過ぎなかった。⁽²⁾

一般に、鎌倉時代における濁声点は恣意的に加点されている、と考えられているのではあるまいか。

しかし、鎌倉時代の文献中にも、この金沢文庫本『群書治要』経部のように、濁声点による濁音表示を高率で行っているものが存する。

(B) 三千院蔵『古文孝経』建治三年点

三千院蔵『古文孝経』建治三年(一二七七)点は、古典保存会から複製本が出て、国語資料として活用されてきている。

奥書は、次の通りである。

建治三年八月 日依垂髮御詠／如形染筆畢本自書生不堪之間／於字紙謬濟々歟尤不便右筆山王院
門葉寂空／ 金王磨之

(別筆) 同九月上旬交点之書本之点不一途頗可謂狼藉本歟／仍以証本移点畢 金王丸重記之

点本記云／建保五年(一二二七)孟夏上旬之比以主水正清原頼尚真人本／書写移点了頼業良業等以此本為相伝本尤可／秘藏者也(云云) 已上

右の奥書から、以下のことが知られる。建治三年(一二七七)に金王丸が寂空に書写移点をさせた。しかし、その底本が、「狼藉本」であったために、翌月、あらたに建保五年(一二二七)の奥書を持つ清原頼尚加点的清家伝来本によって訓点を加えた。

今問題としてゐる声点にも、大きな朱星点と小さな朱星点、および墨圈点が存する。墨点が大きな朱星点を避けるように加点されていることは、複製本によっても知られる。

幸い原本調査の機会に恵まれ、本資料の鎌倉時代訓点には、加点順に、少なくとも次の四筆があることが知られた。^③

①第一次朱点——大ぶりで濃い朱点 ②第一次墨点——濃い墨点

③第二次朱点——小ぶりで薄い朱点 ④第二次墨点——薄い墨点

これらは、仮名字体から、加点時に大きな開きはないものと判断される(その他、南北朝期以降の後筆も見られる)。

試みに、清原教隆はじめ清家累代の氏名を奥書に記す京都大学蔵『古文孝経』鎌倉末期写本の対応箇所と対照してみると、つぎの通りである(所在は、行数で示す。以下、同じ)。

誼（去聲）

（三千院本33行目）

誼（去聲）

（京都大学蔵本対応箇所）

嚴（平聲）

（三千院本245行目）

嚴（平聲）

（京都大学蔵本対応箇所）

右の三十三行目。〇が第一次墨点による墨圈点であり、それが下の清家本と一致する。よって、三千院本の奥書に記された清家本に依る訓点は、この墨圈点であろうと思われる。

また、三十三行目の例は、大きな朱声点（第一次朱点）によって・が加点されているように見える。しかし、原本では、・の一部分は、墨点である。

二四五行目「嚴」の例も、第一次朱声点・に第二次朱点で一を加えたものである。

他に、日本漢音において濁音になることが原則の次濁字に、この大ぶりの朱点（第一次朱点）によって声点を加点した例が、四例存する。しかし、全例左のとおり、単点である。つまり、本資料の第一次朱点は、濁声点を加点していない。そして、それらの漢字に、翌月加点の墨点が濁声点を加えている。

誼（去聲）

(252)

墨（平聲）

(37)

味（去聲）

(76)

識（去聲）

(15)

先に掲げた例を含めて、声点が示す声調は、朱墨同一である。よって、後に清家本に依って墨点を加点した金王丸は、濁音を明示しなかったのであろう、と考えられる。⁴⁾

本資料墨点では、右以外の次濁字に対しても、濁声点が高率で加点されている。呉音の混入かと思われる例を除いて、若干例を、次に掲げる。

馬（上聲）

(24 61)

廟（去聲）

(140)

母（上聲）

(85)

墨（入聲）

(37)

睦（入聲）

(76 196)

武（上聲）

(53)

誼(平) (6) 誼(平) (172, 268) 問(平) (3) 萬(平) (212) 尼(平) (69) 雅(平) (95) など。

墨点の濁声点加点例は、右の例を含め、本文部分だけで、四十五例である。一方、日本漢音で濁音となる字に濁声点を加點しない例は、本文部分に、次の四例しかない。

再(平) (11) 「ゼン」の仮名が振られている) 二(平) (23) 男(平) (211) 美(平) (411)

以上のことから、第一次朱点に濁声点が無かったことも、金丸が「狼藉本」と記した理由の一つであり、それを濁声点が高率で加點されている清家本によって補ったものと考えられる。

○ 久遠寺蔵『本朝文粹』鎌倉中期点

これは、清原教隆の加點本を移点した本であり、高率の濁声点加點がなされている。現存本全十三巻のうち、漢音読と判断される漢字への濁声点加點例は、三七七例である。これに対し、濁声点加點が期待される箇所単点が加點されている例は、十三例のみである。⁽⁵⁾

(二) 鎌倉時代の藤原家点本における濁声点

(A) 金沢文庫本『群書治要』史部

はじめに見た金沢文庫本『群書治要』は、巻第十一〜巻第三十の史部になると、濁声点加點の状況が一変する。

濁声点加點例 (四九例)

- | | | | | | |
|--------|------------------------------|------------------------------|------------------------------|------------------------------|------------------------------|
| ○ 形式…… | 糝 <small>(上)</small> (1515) | 麩 <small>(上)</small> (17136) | 議 <small>(平)</small> (17145) | 饒 <small>(平)</small> (19359) | 任 <small>(平)</small> (21201) |
| | 汝 <small>(上)</small> (25130) | 業 <small>(入)</small> (25142) | 廟 <small>(上)</small> (25144) | 義 <small>(平)</small> (25151) | 虞 <small>(平)</small> (25152) |
| | 妊 <small>(上)</small> (25153) | など、四十五例。 | | | |
| ○ 形式…… | 孝 <small>(平)</small> (22313) | 亡 <small>(平)</small> (21942) | 毅 <small>(平)</small> (25661) | 奴 <small>(平)</small> (30610) | 以上四例。 |

单声点加标点例（一四五例）

任ま（一五3038・一七541・二一207・二二309・二三120137・二四150・二九342538・三〇160207257） 任せ（二三109・二四619）
 雅ま（二五294・三〇250） 餓ま（二五392） 義ま（三〇405426565） 議ま（二九35・三〇2198340390619） など、一四五例。

右に例を掲げた通り、史部における濁声点は、日本漢音において濁音となる漢字の四分の一程度にしか加点されていない。

本資料の奥書から、金沢文庫本『群書治要』巻第十一〜巻第三十の史部は、教隆に師事した北条実時とその孫貞顕によって、書写・加点されたことが知られる。実時の書写は、文永十一年（一二七四）〜建治二年（一二七六）になされ、貞顕による書写は、徳治二年（一二三〇七）〜延慶元年（一二三〇八）に行われた。巻第十一〜巻第十九までは藤原茂範による正元元年（一二五九）・弘長三年（一二六三）などの加点に基づいている。巻第二十一〜巻第三十までは藤原俊国による文永二年（一二六五）等の加点本に基づいている。この史部で使用されるヲコト点は、藤原南家・日野家でも用いられた古紀伝点である。これは、底本である藤原茂範・俊国の訓点を反映したものであろう。

ところが、金沢文庫本『群書治要』史部の濁声点は、右に掲げた通り、大部分、清原家が用いた∞形式である。あるいは、藤原家の底本にあった濁声点は、○形式の四例だけであったものかもしれない。たとえ、∞形式の濁声点は、元の○形式が移点にあたって改変されたものであったとしても、経部と比較して、濁声点加点率が低いことは動かない。

藤原家加点本は、和訓の声点においても濁声点を用いていないことが既に指摘されている。^(c)

よって、『群書治要』鎌倉中期点の経部と史部との濁声点加点に見られる差は、清原家と藤原家との差ではないか、と考えられる。すなわち、鎌倉時代中期において、清家は濁声点加点が密であり、藤家は粗であった、と判断

される。

三、清原家・藤原家以外の博士家加点資料における濁声点

まず、清原家と同じ明経家である中原家加点資料から見る。

(一)、鎌倉時代の中原家点本における濁声点

(A) 高山寺藏中原本『論語』卷第四嘉元元年点

嘉元元年(一三〇三) 中原師有の「累祖之秘説奉授」の奥書を有する卷第四について、日本漢音において、頭音を濁音として受け入れた漢字の声点加点を見る。

濁声点加点例(四四例)(へへ内は反切。以下同じ。)

○形式……暴ホウ ホウ (94) 以上一例。

○形式……冒ホウ ホウ 乱ラン (16) 任ニ ニ すス (229) など四三例。

単声点加点例(二二一例)

隅ク (10) 問モン (15) 仁ニ (25) 敏ミン (37) 吳ウ (61) 美ミ (III) など。

右のとおり、濁声点加点例は、比較的多く見られる。しかし、中原家で使用された○形式の濁声点は、一例のみで、他は、すべて○形式の濁声点である。また、この資料は、「中原家の訓説に基きつつも諸説を勘案した」らしいことが指摘されている。⁽⁷⁾

よって、本来の中原家点は濁声点をあまり使用していないものであった、と考えられる。

(B) 中原康隆筆『尚書』卷第六元徳二年点

本資料の奥書は、左記の通りである。

元徳二年(二三三〇)七月九日書写畢／縫殿権助中原康隆(花押)／同十二日終朱点切了／同十五日終墨点切了

(花押)／同十六日一校了／(別筆)権大外記中原重貞

朱声点はわずかであるものの、朱の濁声点は見られない。

墨声点も、次の例が、日本漢音として濁音となる漢字に加点された声点の全例である。

濁声点加点例……冒ハツ〈莫報反〉色(15) 冒ハツ乱(16) 任ニす(229)

单声点加点例……真マコ内サイ〈如鋭反〉(3)

濁声点加点例は、四例中三例であるから、高率の濁声点加点ではある。しかし、三例とも〇形式であり、中原家の伝統的な訓点とは考えられない。

また、この資料では、次のように、仮名に濁点が加点されていることに注目される。

彭ボウ濮ボク〈音ト〉(140) 昵ニ女メ乙ヲ反ヘ比ヒ(57) 戊ボ午ウ(550) 冒ハツ虐ゲツ(16) 奉ボウ迎エイ(208) 牧ボク(128)

右の中には、伝統的な反切・同音字注を加点する例が含まれる。

あるいは、康隆は、漢字は濁声点を加点する対象として適当ではない、と考えていたものかもしれない。

以上、中原家訓点は、本来、濁声点を多くは加点しないものであったと考えられる。

(二) 鎌倉時代の菅原家点本における濁声点

菅原家には、大江家と同じく、平安初期から訓説が存したことが訓点本の奥書等から知られる。⁽⁸⁾しかし、多くは移点本であったり、校合に菅家本を引く訓点本であり、鎌倉時代において菅家の訓点⁽⁹⁾が加点された漢籍は、少ない。

(A) 専修大学図書館蔵『和漢朗詠集』上巻建長三年点

そこで、漢籍ではないが、文章博士菅原長成が建長三年（一二五二）に加点した専修大学図書館蔵『和漢朗詠集』上巻の実態を調査する（明らかな呉音形は除外する）。濁声点は、全例、○形式である。

濁声点加点例（一四五例）

牙^カ（八五六） 雅^カ（六九一） 凱^カ（三八五） 外^カ（五五四・六七一） 岸^カ（三三・二四六）
 三六三・三九四） など。

单声点加点例（五例）

月^グ（五三三） 納^グ（三六五） 微^グ（四七六） 眉^グ（七六六） 外^グ（七八三）

右のとおり、濁声点の加点率が高い。

(B) 高山寺蔵『史記』周本紀鎌倉初期点

例を加えるために、高山寺蔵『史記』周本紀鎌倉初期点の実態を見る。本点は、菅家の訓点を伝えるものと推定されている⁽¹⁰⁾。なお、濁声点は、全例、○形式である。

濁声点加点例（八四例）

嵬^ク（五七七） 魏^ク（五八四・六四九） 赧^ク（六〇一・六三二） 亡^ク（七〇一） ト^ク（七〇八） 戎^ク（七〇九） など。

单声点加点例（三二一例）

戎^ク（六） 宜^ク（九） 蜜^ク（七二） 虐^ク（一〇三・一三二） 牧^ク（一九九） 滅^ク（二〇二） 五^ク（三六） など。

この資料も、濁声点加点例が全体の七三％であり、加点率が高い。しかし、右の専修大学図書館蔵『和漢朗詠集』上巻とくらべると、不徹底である。あるいは、菅家の訓点を大部分残しながらも、その総てを伝える資料ではないのかもしれない。

右から、鎌倉時代の菅家訓点は、濁声点を高率で加点するものであったと、考えられる。

四、鎌倉時代の仏家加点資料における濁声点

博士家において使用された濁声点は、仏家のものを引き継いだことが指摘されていた。

○は、天台宗から藤原家に伝わり、中原家もこれを学んだのである⁽¹¹⁾ことが言われている。○も、天台宗寺門派で発生し山門派でも使用されるようになり、十一世紀末には真言宗に拡大し、博士家に及ぶことが指摘されている⁽¹²⁾。そこで、以下、仏家の訓点本における濁声点加点率を調査してみる。

(一)、天台宗における濁声点

鎌倉時代の天台宗加点残存本に、○声点が使用されているものか否か、いまだ筆者の調査が及んでいない。

また、天台宗においても、○声点は、使われ続けている。

その例として、広島大学蔵『八字文殊儀軌』永暦二年(一一六二)点の実態を見ると、意識字部分の漢字への濁声点は、ごくわずかである⁽¹³⁾。

しかし、陀羅尼部分には、丁寧な濁声点が加点されている。

濁声点は、天台宗で発想され、他宗がそれを学んだ。しかし、その後、天台宗では、漢音を示すためには濁声点をそれほど使用しなかったのではなからうか。

(二)、真言宗における濁声点

(A) 『仏母大孔雀明王経』

『仏母大孔雀明王経』字音点においては、院政期以前には、濁声点が全く使用されていない。この事実は、「院政期以前には、孔雀経読誦漢音が伝来当初のまま原音に近いかたちで学習傳承されていたことを示すもの」と考えられている。⁽¹⁴⁾

しかし、鎌倉時代に入ると、濁声点加点が見られる。⁽¹⁵⁾

左に、上巻巻頭から五十行目までの、日本漢音における濁音字への声点加点例を抜き出してみる。ただし、陀羅尼・梵語音訳字は除き、挙例にあたって、各本の振り仮名は省略する。所在は、比較のため、国会図書館蔵貞心版本の行数で統一して示す。

① 仁和寺蔵本建久八年（一一九七）頃点（沼本克明先生からお借りした移点本に依る。）

濁声点加点例……母^{上濁}（17 17 47） 我^{上濁}（6 17 19 19 33 38） 如^{上濁}（6 7 32 38 45） 願^{去濁}（7 19 36 36）

人^{上濁}（13 14） 惱^{上濁}（34 45 49） 未^{去濁}（39） 木^{入聲濁}（41） 拇^{去濁}（41） 悶^{去濁}（42） 爾^{上濁}

（42 47） 而^{上濁}（44 50） 語^{上濁}（46） 滅^{入聲濁}（48） 汝^{上濁}（49）

单声点加点例……我^上（6） 獄^入（35）

② 東京大学蔵本鎌倉中期墨点

この本は、複製本が公刊され、分紐分韻表も公表されている。⁽¹⁶⁾

濁声点加点例……母^{上濁}（17 47） 我^{上濁}（6 6 7 17 19 19 33 38） 如^{上濁}（6 7 38） 願^{去濁}（7 19 36 36）

人^{上濁}（13 14） 惱^{上濁}（34 45 49） 未^{去濁}（39） 木^{入聲濁}（41） 拇^{上濁}（41） 爾^{上濁}（42） 悶^{去濁}

（42） 而^{上濁}（44 50） 語^{上濁}（46） 滅^{入聲濁}（48） 汝^{上濁}（49）

单声点加点例……獄^{入聲}（35）

③龍門文庫蔵延慶点

濁声点加点例……母^上 (17) 我^上 (6 6 7 17) 如^平 (6 7 32) 願^去 (7 19) 人^平 (13)惱^上 (34) 拇^上 (41) 悶^去 (42)单声点加点例……獄^入 (35)

④国会図書館蔵貞応三年(一二二四)頃点

濁声点加点例……母^上 (1 7 17 47) 我^上 (6 6 7 17 19 19 33 38) 如^平 (6 7 32 38 45) 願^去 (7 19 36 36)人^平 (13 14) 惱^上 (34 45 49) 未^去 (39) 木^入 (41) 拇^上 (41) 悶^去 (42) 爾^上(42 47 50) 而^平 (44) 語^上 (46) 汝^上 (49)单声点加点例……獄^入 (35) 滅^入 (48)

以上、本によって小異があるが、濁声点加点率は、比較的高い。

(B)『理趣経』

高山寺蔵本の影印ならびに分紐分韻表が公表されている。⁽¹⁷⁾

以下、公刊されている影印・分紐分韻表に基づいて、若干例を記す。

①高山寺蔵鎌倉中期点(重文第一部二九七号)

(a)朱点

濁声点加点例……義^去 (47 48 89 124 158) 爾^上 (174 178 218) 尼^平 (11) 微^平 (12 67) 女^去 (174)語^上 (100) 如^平 (4 5 6 7 10 11)单声点加点例……義^去 (67 107 117 158) 眉^平 (68) 語^平 (9) 如^平 (4)

(b)墨点(朱点を補う加点)

濁声点加点例……義_(去) (19 39 40 54) 義_(上) (89) 眉_(上) (68) 尼_(平) (58) 而_(平) (13 18 67 207)

微_(平) (40 54) 味_(去) (28) 女_(上) (151 157 174 182) 女_(去) (151 157) 語_(上) (9 168) 如_(平) (18 36 37 45 45)

单声点加点例……儀_(去) (132) 義_(平) (192) 獄_(入) (32)

②高山寺藏正保四年(一六四七)写本(重文第四部三六函五号)

奥書に依れば、この本の朱声点は、菅原為長(一一五八—一二四六)が加点したものを移点している。

(a) 朱点

濁声点加点例……儀_(平) (116) 義_(去) (39 40 46 47 53 63 75 81 83 96 104 110 113 123 131 137 138 148 165) 獄_(入) (33)

眉_(平) (64) 尼_(平) (11 56) 而_(平) (13 18 64 180) 微_(平) (12 40 53 67 75 84 96 104 113 123 131) 味_(去) (28)

語_(上) (9) 語_(去) (89) 語_(上) (146)

单声点加点例……爾_(上) (151 154 157 190)

(b) 墨点(朱点を補う加点)

濁声点加点例……義_(上) (19 81) 義_(去) (19 39 81) 義_(平) (40 47 53 63 75 83 104 110 131 148 165) 爾_(上) (151 154 157 190)

語_(平) (9) 如_(平) (4 4 5 6 7 18 36)

单声点加点例……儀_(去) (116) 義_(去) (96) 獄_(入) (33)

右のとおりであり、真言宗では濁声点が高率で加点されている、と言えよう。

真言宗加点資料では、院政期の大谷大学図書館蔵『三教指帰注集』長承三年(一一三四)点においても、濁声点が高率で加点されている。⁽¹⁸⁾

(三)、法相宗における濁声点

これに対して、南都古宗の法相宗では、院政期の漢音訓読資料には、原則として清濁を区別していない。

興福寺蔵『大慈恩寺三蔵法師伝』においても、まれに、C点(二〇九九年)・D点(二〇九九年頃)・E点(一一一六年)・F点(一一七〇年)に濁声点が見られるが、同一字に常に濁声点が付点されるわけではない。このような状態を、築島裕は、「声点の歴史的発達の段階から見て、比較的早い時期の状態を示してゐるものと考えられる。」としている。⁽¹⁹⁾

国会図書館蔵『大慈恩寺三蔵法師伝』巻第三(法隆寺僧覚印書写加點)・『弁正論』保安四年(一一三三)点(法隆寺僧覚印・静因書写加點)などにおいても、同様である。

降って、鎌倉時代に入って加點された、京都大学人文科学研究所蔵興福寺僧弁淵加點『大慈恩寺三蔵法師伝』貞応二年(一一三三)墨点でも、濁声点加點例は、日本漢音において濁音形となる例の一割程度に過ぎない。左に、若干例を記す。

濁声点加點例……^{ハク}質^{ハク}(二一八) 武^フ(六五) 馬^ハ(六六六) など。

单声点加點例……^{ハク}漢^{ハク}(二〇八) 帽^{ハク}(一三二) 慕^{ハク}(二二六一・七五五) 莫^{ハク}(六六六) など。

同時に弁淵が加點した『大唐西域記』貞応二年(一一三三)点も、同様である。⁽²⁰⁾

これらの点から、法相宗では、濁声点は学んだものの、『大慈恩寺三蔵法師伝』『大唐西域記』『弁正論』の訓読において、さほど盛んに使用されなかったものと考えられる。

ところが、法相宗所用の喜多院点が付点されている図書寮本『類聚名義抄』一一〇〇年頃点では、反切・同音字に高率の濁声点が付点されている。⁽²¹⁾

この、図書寮本『類聚名義抄』の反切・同音字に高率の濁声点が加点されていることについて、「清濁表示法の歴史的展開」から、「複声点方式に吸収統合されつつあった時期に図書寮本類聚名義抄が作成されたことを物語る」という解釈が示されている。⁽²²⁾

当時、法相・真言の交流が盛んで、図書寮本『類聚名義抄』の撰者も、法相・真言を兼学し天台とも関係があった覚印のような僧ではなかったか、と推定されている。⁽²³⁾ よって、法相・真言を兼学した僧を通じて、法相宗でも高率の声点加点が行なわれるようになった、ということになる。

ただし、右に濁声点加点が粗の資料として指摘した『弁正論』保安四年点も、法相・真言を兼学した覚印の加点であるから、図書寮本『類聚名義抄』の加点者が覚印のような僧であったならば、これに濁声点が密に加点されていることは、訓読資料中の漢語と、字書の音注との位相差として考える必要が生じる。

五、濁声点加点率の差が生じた理由と実際の発音

以上、濁声点の加点率によって、鎌倉時代の漢音資料は、大きく二つに分けられる。

- 一、濁声点をよく加点する博士家・宗派——清原家・菅原家・真言宗
 - 二、濁声点をあまり加点しない博士家・宗派——藤原家・中原家・法相宗（・天台宗〈推定〉）
- 右が認められるとして、このような差が生じたのは、なぜであろうか。

平安時代には、中国漢字音における声母の別を、声点の位置・形によって区別しようとする資料が存した。⁽²⁴⁾ 醍醐寺蔵『妙法蓮華経积文』平安後期点などが、その例である。その醍醐寺蔵『妙法蓮華経积文』平安後期点は、片仮名の音注には日本語の音韻体系による清濁の区別を行なっている。

院政期の図書寮本『類聚名義抄』や唐招提寺蔵『孔雀経音義』でも、掲出字には、原則として单声点しか見られない。⁽²⁵⁾しかし、反切・同音字注や注文の漢字には、濁声点が加添されている。

ところが、鎌倉時代になると、高山寺蔵『孔雀経单字』鎌倉初期点では、反切字ばかりでなく掲出字にも、濁声点が加添されるようになる。

漢籍訓読資料においても、『春秋経伝集解』保延五年(一二三九)点には、单声点の加添しか存しない。しかし、金沢文庫本『群書治要』鎌倉中期点の春秋左氏伝には、高率の濁声点加添が見られた。

以上のように流れをとらえると、鎌倉時代以降は、濁声点を加添するのが原則であり、濁声点を加添しないものは古い加添法を留めた資料であることになる。

ただし、漢音を示す声点加添において、古い加添法を留めた学派・宗派でも、清濁をまったく区別しなかったわけではない。

たとえば、中原康隆筆『尚書』元徳二年点では、仮名には濁点が加添されていた。また、天台宗・法相宗においても、『法華経』等の呉音読資料では、平安後期・院政期から、本来の濁音と新濁(連濁による濁音)とを区別する、⁽²⁶⁾詳しい濁声点加添がなされている。

しかし、濁声点をあまり加添しない学派・宗派においては、漢音を示す場合に濁声点を当該漢字に直接加添するのは望ましいことではない、と考えられていたのではあるまいか。

漢字音に清濁を区別することは、日本語の音韻体系によって中国語音を把握することである。よって、濁声点を加添した漢字の音は、日本語の濁音として発音されたものであろう。

ただ、鎌倉時代において、濁声点をあまり加添しない学派・宗派における漢字の頭音がどのように発音されていたのかは、難問である。中国語音(漢字音)を仮名書きしていることと、他家の濁声点を取り込んで濁声点を増加

させていることから、濁声点をあまり加点しない学派・宗派においても、日本語の濁音が発せられていた、と解釈することもできよう。しかし、古い加点法を鎌倉時代に伝えたばかりでなく、中国語原音における声母の区別を留めた発音がされていた可能性も、否定できない。

六、むすび

以上、鎌倉時代における漢音資料は、濁声点の加点率から大きく二つに分かれることを述べた。

本稿で分析した資料は、ごくわずかなものでしかない。しかし、濁声点をよく加点する清原家・菅原家・真言宗で用いられる濁声点は○形式で共通し、濁声点をあまり加点しない藤原家・中原家（・天台宗へ推定）で用いられる濁声点は◦形式で共通していることは、偶然ではないと考えられる。

ただし、訓読資料においては濁声点をあまり加点しない法相宗にあって、院政期の図書寮本『類聚名義抄』反切・同音字声点に密な濁声点加点が見られたこともあり、鎌倉時代においても、同一学派内における位相差の問題が残る。

今後、調査文献を増やすことによって、引き続き考えたい。

注

(1) 築島裕「濁点の歴史」(『東京大学教養部人文科学科紀要』第三三輯 国文学漢文学X)、同「古点本の片仮名の濁音表記について」(『国語研究』第三三号)、沼本克明『日本漢字音の歴史的研究』(一九九七年、汲古書院) 第六部第三章。

(2) 以下、濁声点加点の実態を調査する前提として、鎌倉時代の日本漢音で、いわゆる濁音として把握されていた漢字と、そ

うでない漢字とを分ける必要がある。その具体的な作業については、佐々木勇「金沢文庫本『群書治要』経部鎌倉中期の漢音―声母について―」(『新大國語』第三十号、二〇〇五年三月)に記した。以下、本稿で取り上げる諸資料についても、これと同様の手順で、日本漢音として濁音であることを判断した。

(3) 原本の閲覽をご許可下さった三院当局、並びに、閲覽に際しお世話いただいた東京国立博物館の皆様には、記して御礼申し上げます。

(4) 墨点の濁声点には、全体の三分の一程度〇形式が含まれる。よって、全例が清原家点本から補ったものであるか否か、疑問が残る。しかし、それらの例に該当する箇所も、清家本(京都大学蔵『古文孝経』鎌倉末期写本)では、濁声点が加えられている。ただし、京都大学蔵本清家本では、「睦」には、「ホ」の仮名を加えて濁音であることを示している。また、「議」に該当する箇所の本文は「誼」であり、「或本乍議」の注記がある。

(5) 佐々木勇「金沢文庫本『群書治要』と久遠寺蔵『本朝文粹』との漢字音の比較―鎌倉時代中期における漢籍と和化漢文との字音注の差異について―」(『音声研究』第八卷第二号、二〇〇四年八月)、参照。

(6) 築島裕「仮名声点の起源と発達」(『金田一春彦博士古稀記念論文集 第一卷 国語学編』(一九八三年、三省堂)、所収)。

(7) 小林芳規「高山寺蔵論語 解題」(『高山寺資料叢書 第九冊 高山寺古訓点資料第一』(一九八〇年、東京大学出版会)所収)。

(8) 平安時代の文章道において、大江家・菅原家が重要な役割を果たしていたことは、古記録・古訓点本奥書によって、知られる。ただし、大江家の博士による鎌倉時代の古訓点資料は、現存しないらしい。大江家訓点は、諸訓点本に異説・異訓として引用されるのみである。小林芳規『平安鎌倉倉漢籍訓読の国語史的研究』(一九六七年、東京大学出版会)、参照。

(9) 前注小林著書第五章、参照。

(10) 注(8)小林著書、一二二頁。ただし、築島裕「本邦史記伝承史上における高山寺本史記の位置」(『高山寺古訓点資料第一』(一九八〇年、東京大学出版会)所収)は、「紀伝系統の訓点」であろうが、「何家の流」であるかは不明、とする。

(11) 注(8)小林著書、参照。

- (12) 沼本克明『日本漢字音の歴史的研究』(一九九七年、汲古書院)、八九一頁。この伝播に関して、同書八九二頁に、「博士家の濁声点については、その家による使い分けの存することが小林芳規博士によって指摘されているが、それは、密教系での濁声点のどの形を源流として採用したかによって生じた差異であったと考えられよう。」と、まとめている。
- (13) 井上親雄「広島大学蔵八字文殊儀軌古点」(訓点語と訓点資料)第三十九輯。一九六八年十月)に依る。
- (14) 沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』(一九八二年、武蔵野書院)、一〇六七頁。
- (15) 院政末期く鎌倉初期加点かと思られる東寺蔵本(第十二函四号)に、すでに詳しい濁声点加点が存する(沼本克明先生からお借りした移点本に依る)。「仏母大孔雀明王経」字音点に振り仮名が全卷に加えられ、陀羅尼・本文の漢字ともに濁声点加点がされている仁和寺蔵本建久八年(一一九七)頃点が加点された時期に、孔雀経誦音から、中国語「原音の姿が完全に消滅した」と考えられている。前注著書、一〇八一頁。
- (16) 『東京大学国語研究室資料叢書 第十五巻 古訓点資料集(一)』(一九八六年、汲古書院)、所収。原裕「東京大学国語研究室蔵『仏母大孔雀明王経』字音点分韻表」(訓点語と訓点資料)第一〇一輯、一九九八年九月)・李京哲「東京大学国語研究室所蔵『仏母大孔雀明王経』の分韻表」(鎌倉時代語研究)第二十二輯、一九九九年五月)。
- (17) 沼本克明「高山寺蔵理趣経鎌倉期点解説並びに影印」(鎌倉時代語研究)第六輯(一九八三年、武蔵野書院)、同「高山寺蔵『般若理趣経』—分韻表—」(昭和六十三年度高山寺典籍文書綜合調査団 研究報告論集)〈高山寺典籍文書綜合調査団、一九八九年三月〉、参照。
- (18) 大谷大学『三教指帰注集の研究』(一九九二年、大谷大学)に依る。仁和寺蔵『三教指帰』鎌倉初期点でも、高率の濁声点加点がなされている(築島裕・小林芳規・沼本克明・花野憲道・月本雅幸・松本光隆・山本真吾「仁和寺宝蔵三教指帰古点釈文」(訓点語と訓点資料)第九七輯、一九九六年三月)参照)。
- (19) 築島裕『興福大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究 研究篇』二五八頁。
- (20) 法相宗加点資料には、△形式の濁声点を使用するものが見られる。この△声点は、いわゆる濁音ばかりでなく、来母字にも加点されている。この点、他の濁声点と異なる。佐々木勇「声点△の機能—『弁正論』保安四年点について—」(「かがみ」

第三十一号、一九九二年三月、参照。

- (21) 高松政雄「『正音』の清濁——名義抄の性格の一面——」(『国語国文』第四六卷一—号、一九七七年十一月、参照)。
- (22) 沼本注(12)著書、八一七頁。
- (23) 築島裕「国語史料としての図書寮本類聚名義抄」(『図書寮本類聚名義抄』(一九六九年、勉誠社)所収)。
- (24) 沼本(14)著書等、参照。
- (25) 図書寮本『類聚名義抄』には、一例のみ、掲出字濁声点例がある。「采」(網)「上」(異)「(一九七七)」という、いわゆる文選読みの例である。
- (26) 注(14)沼本著書、参照。

〔付記〕本稿は、二〇〇四年度日本語学会中国四国支部大会における研究発表に基づいている。席上、沼本克明先生・榎木久薫氏・西村浩子氏から、有益なご意見・ご質問を頂いた。記して、感謝申し上げます。